

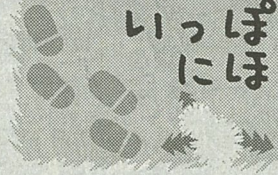
吉村 正志 (OIST「OKEON」美ら森プロジェクト)



この夏休み、沖縄県立博物館・美術館の企画展に、「OKEON美ら森プロジェクト」をテーマに出展している。本格的な博物館展示を手掛けるなんて、もちろん初めての経験。厳しい日程のなか、プロジェクトスタッフを中心に、OIST研究室の多くの仲間を借りた。プロジェクトに込めた僕らの思いが、来館する皆さんに少しでも伝わればうれしい。祈るような気持ちだ。同時に、展示を作る難しさを知る良い機会ともなった。

訪れる大多数の人たちにとって、博物館はこうした展示や講演を見聞きする場所だろう。それに対して、博物館を利用する研究者にとっては、そこは全く違う意味を持つ。例えばアリ研究者の僕にとつての博物館は、僕にとつての博物館は、時間を越えてアリの標本を収集して保管・管理してくれるタイムカプセル。そして、その豊富な材料を使って、地球上の生物の進化や多様性の謎に迫る研究基地だ。

未来へ いっぽほ



タイムマシンでもない限り、100年前のその場所にどんな生物がいたのか？を個人で調べることは簡単ではない。生き物の名前ですら、100年もしたらたいてい変わっているのだ。唯一、博物館が長年大切に保管していた標本だけが、そのリアルな姿を現代の僕らに届けてくれる。

僕らの日々の活動に比べ、自然の変化は一見緩やかだ。その緩やかさゆえに見落としてきたが、「いつの間にか」起こった変化は予想以上の影響を僕らにもたらす。過去から学び、そして今を未来へ伝えるために、先人たちは博物館という名の巨大なタイムカプセルを作った。豊かな自然環境とともに生きてきた沖縄。そして変わりゆく沖縄。将来の学びのために、自分たちは今何を残せるだろうか？

自問自答しながら、僕は日々プロジェクトを進めている。

博物館はタイムカプセル

2016年8月5日(金)

琉球新報

16面